

# アルフレッド・マーシャルとウォルター・レイトン ーケンブリッジ学派における知の継承と知の創造ー

近藤 真司 (大阪府立大学)

はじめに

マーシャルの下で教育を受けた人物としては、ケインズやピグーが存在する。その中には、マーシャルがケンブリッジで創設した経済学トライポス (卒業試験) の第1回目 (1906・1907) に第1優等生を取得したウォルター・レイトン (Walter Layton, 1884-1966) が存在する。彼は、1884年3月15日にロンドンのChelseaで両親とも音楽家の家庭で生まれる。1901年に、レイトンはロンドン大学のUniversity Collegeで歴史学と経済学を専攻している。当時、UCでは、ケンブリッジから講師としてフォックスウェルとピグーが教えに来ている。その中でも、マーシャルの下で教育を受けたC.P.サンガーがレイトンに統計への関心をもたすことになる。サンガーはレイトンにケンブリッジのトリニティ・カレッジ奨学金をとり、新しく制度化される経済学トライポスをとることを勧め、レイトンは1904年10月にケンブリッジに進学する。

彼は卒業後ケインズとともに講師になり、ケンブリッジの経済学部のスタッフとして教育・研究に従事する。マーシャルは、ケンブリッジで理論的分野と応用的分野の両方にスタッフを充て、経済学教育の充実を図ったのである。ケインズが理論的側面の講義を担ったのに対して、レイトンは「現代産業の構造と諸問題」という講義を担当し、応用経済学分野を担うことになる。マーシャルの経済学体系には理論的側面と応用的側面が存在する。レイトンはマーシャルの後者の後継者である。レイトンの著作としては1912年に出版された『物価研究入門』(An Introduction to the Study of Prices)があり、それはL.L.ブライスにより高い評価を受け、その著作が彼の学問的名声を高めるのである。しかしレイトンは第一次大戦により政府の要職に就くように要請され、戦後、大学には復帰せずに『エコノミスト』の編集長 (1922-38) として従事する。

レイトン研究においては、彼の親族からの聞き取りを中心にした彼の生涯についてのHabback (1985) の研究が存在するが、彼の業績をマーシャルとの関係では十分に位置づけられていない。さらに、マーシャルの産業経済学の系譜についてのラファエリイによる研究でもレイトンへの言及はされていない。西沢会員の研究 (2003) において、レイトンへの言及が存在するのみである。われわれは、さらにレイトンとマーシャルの関係、ケンブリッジ学派における産業経済学の分野についても明らかにする必要がある。

## I. マーシャルと経済学教育

『経済学原理』を中心にマーシャル自身をとらえると彼の全体像を見失うおそれがあることは指摘されており、その中でも彼の経済学教育への貢献とその役割からもマーシャルをとらえ直していく必要がある。大学の役割には、「研究」を通しての「知の創造」と

「教育」を通しての「知の継承」の側面がある。本報告では、アルフレッド・マーシャルと彼の学生であったウォルター・レイトンの考察を通して、マーシャルとケンブリッジ学派の「知の創造」と「知の継承」を考えていきたい。

マーシャルは、経済学教育充実のために経済学トライポスを創設し、経済学という「学問の将来」を考えた経済学者である。マーシャルの経済学教育に関しては、内外の研究が存在し、経済学トライポス創設の歴史的な経緯に関しては、橋本昭一会員の研究が存在するが、本節と次節ではマーシャルの「知の継承」という側面から考察していく。

1888年のフォックスウェルの「連合王国における経済学の講座の半数は・・・」という言葉やマーシャルの80歳を祝う盛大な誕生日で述べられた「われわれはマーシャルの生徒である」という言葉からも彼のイギリスでの経済学教育の充実への貢献は大きい。

マーシャルにとっては、経済学トライポスを創り経済学者並びに経済学教育を受けた人材を世に送り出すことも彼の課題であり、それがケンブリッジで成し遂げた大きな業績の一つでもあった。このことは、ケインズも認めているところである。さらに、どのように経済学教育を行うかということは方法論争の一つでもある。経済学トライポスを創り出すために、マーシャルは自らの研究並びにシジウィックをはじめ多くのケンブリッジの同僚たちとの人間関係をも犠牲にしてきたのである。

マーシャル研究においては、彼の『原理』を中心に初期・後期との区分を行ったりするが、マーシャルの就任講演「経済学の現状」を彼の業績のなかでの位置づけも必要であり、彼の経済学教育の視点からその役割は大きいように思われる。「経済学の現状」は、イギリス経済学を取り巻く状況を示すのと同時に「経済学」という学問の将来像を示すものである。この講演によりマーシャルの経済学者の評価を内外に高めたと言われるが、これはケンブリッジの歴史学研究者批判であり経済学トライポスの計画を表明するものである。経済学を現状のままで維持したかったシジウィックは、マーシャルの講演の中身を知って激怒したと言われている。さらにそれは同僚との決別であり、カニングガムとは経済学トライポスをめぐって論争を戦わすことにもなる。まさに、「経済学の現状」はケンブリッジ大学内で大きな波紋を引き起こすのである。さらに、マーシャルが経済学トライポスを創設し、教授職をピグーに譲りレイトンとケインズをスタッフに任命したことは、コラードの言葉をかりれば、マーシャルとピグーによる無血革命(Palace Revolution)である。

## II. 経済学トライポスの創設と経済学の将来

教授就任後、マーシャルは学生たちへの経済学教育と経済学トライポス創設のために奔走するのである。1886年、マーシャルは学長に自らのポケット・マネーからの「マーシャル賞」の創設を申し出ている。この賞は経済学の試験によるものであり、モラル・サイエンスとは切り離して学生たちに経済学の受験勉強をさせることを意図したものである。さらに、1891年にはトライポスを修了した学生に経済学研究の継続を意図した論文形式の賞である「アダム・スミス賞」も創設する。

カニングガム、シジウィックは、経済学をモラル・サイエンスや歴史学トライポスのカリキュラム内で教育すべきであると考えていたのに対して、マーシャルは経済学をそれらの分野から切り離されたなかでの教育方針を持っていた。このような教育観の違いがカニングガムによるマーシャルの『経済学原理』での経済史解釈への批判としてでてくるのである。論争嫌いのマーシャルはこの批判に応え、彼は理論から歴史まで一冊の本にまとめるのは困難と考え、後に『産業と商業』を出版することにもなる。

次に、女性学位をめぐるマーシャルとシジウィックとの対立であるが、女性に学位を認めるかどうかの問題だけでなく両者の「経済学」という学問への考え方も大きく影響している。マーシャルが教授に着任時の彼の講義への参加者の4分の3が女子学生であり、その後少し減少はするが3分の1を占めていた。しかもその大半がシジウィックが創設したニューナムの女子学生であった。経済学は他の学問より取り組みやすいということでシジウィックが多くを学生をマーシャルの講義に送り込んでおり、優秀な女子学生も存在するが一般的に成績が良くないとマーシャルは指摘している。

マーシャルにとっては、モラル・サイエンスや歴史学と比べても劣らない「経済学の将来」を背負う優秀な学生が経済学の講義を受講し、トライポスに挑むことを望んでいた。後の話になるが、彼はメイナード・ケインズ本人に経済学トライポス受験の働きかけや父親ネイビルから息子への説得依頼を試みている。

マーシャルがケンブリッジに戻ってから、約18年の歳月をかけてようやく1903年に評議会で承認されるのであるが、歴史学科を代表するカニングガムとマクタガートの2人は反対した。カニングガムは経済学研究のためには歴史学研究の必要性を強調し、マクタガートは経済学のスタッフの少なさを問題にした。

『タイムズ』紙は経済学トライポスには賛意を示したが、ビジネス教育についてスタッフの少なさやカリキュラムが実業家養成に十分に答えられないのではないかとすることを指摘する。マーシャルもそれに説明を行うが、彼にとっては実業界に輩出する人材よりも「経済学の将来」を担ってくれる後継者の養成が急がれるところなのである。

### Ⅲ. ケンブリッジでのウォルター・レイトン

ケンブリッジに進学したレイトンは、マーシャルの講義に出席しケインズとは違いそれらが大変明解であり十分出席の価値があるものと評価した。1905年から3年間にわたり彼はマーシャルの講義に参加し、マーシャル経済学に没頭したのである。レイトンや当時の学生にとって、マーシャルの経済学講義の魅力は、現実問題と密接したところにあった。

レイトンが受けたマーシャル講義としては、「信用と投機」「現代産業の構造と諸問題」「現代統計の解釈」がある。レイトンは、マーシャルの勧めにより学生時代の1905年に『エコノミック・ジャーナル』に「アルゼンチンと食物供給」という論文を発表している。これは、マーシャルが1904年にアルゼンチンとオーストラリアを話題に出し景気変動について講義をしており、それをまとめたものと思われる。

1906年に、レイトンは経済学トライポス・パートIで第1優等生を取得しているが、彼の評価としてはマーシャルは厳しい言葉を残している。同年、ケインズはマーシャルの勧めにもかかわらず数学のトライポスを受験し、第12位合格の成績しか残せず、翌年には文官試験でインド省に入省する。レイトンの評価を高めたのは Wincheser Reading Prize で第2位に入賞したことであり、入賞は周りを驚かしている。1907年の経済学トライポス・パートIIでも第1優等生を取得している。同年、ケンブリッジの最初の postgraduate の経済学の贈与である奨学金をとり、ケインズが受賞を逃したコブデン賞も獲得している。1908年にレイトンは「労働者教育協会」での講義時に、『エコノミスト』の編集主幹である F.ハーストと出会い、同社に1週間に一度 Assistant editor としてへ出向くこととなる。

1908年には、ケンブリッジではマーシャルの後任候補の選出が行われ、ピグーが教授に就任する。その時、ピグーはマーシャルが行ったように、講師二人分として年100ポンドずつがポケットマネーから出すことが約束され、レイトンとケインズが講師となる。レイトンは、ピグー教授の下「現代産業の構造と諸問題」の講義を担当することとなり、後に教授となるロバートソンをはじめ多くのものが受講したと記録されている。ハロッドの『ケインズ』伝によると、ピグー、レイトン、ケインズはそれぞれ非常に違った講義ぶりで立派な成果を収め、この小さなクラスから後に有名となった注目すべき経済学者の一群を生み出すことになったのである。

1910年に、レイトンは彼の講義の受講生でマーシャルの最後の学生である Dorothy Osamaston と結婚をしている。結婚に際し、生活のためケンブリッジを離れることを悩んでいる時に、マーシャル夫妻は祝福し彼を強く引き留めている。レイトンは、1912年に『物価研究入門』という書物を出版する。この書物は、19世紀の価格変動の分析であり、生活水準と所得の関係、名目賃金と実質賃金の動きを著したものであり、L.L.Price により極めて高い評価の書評が『エコノミック・ジャーナル』(Vol.22, No.86, Jun. 1912)に掲載される。さらに、翌年には、『労働と資本の諸関係』(*The Relations of Capital and Labour*)という書物も著す。レイトンはイギリス産業の深い知識を持ち統計の効果的な使用をする応用経済学者という地位を確立した。第一次世界大戦が始まると、レイトンは政府に引き抜かれ、戦後はマーシャルとケインズの両者からのケンブリッジに戻ってくるようにとの強い説得にもかかわらず、レイトンは政府にとどまり国際連盟の仕事などに従事する。

レイトンのケンブリッジでの業績を評価すれば、ピグー、ケインズが経済理論的分野で活躍したのに対して、彼は経済統計学並びに応用経済学分野を担いアカデミックな側面と実務的な能力を持ちあわせていた経済学者である。マーシャルの著作からもわかるように彼自身は産業経済学分野に対して大いなる関心を持っていた。レイトンには経済学スタッフとしても手薄であったためその分野での研究・教育に大いに彼は期待していた。

コラードが指摘するように、レイトンの統計の能力と彼の実践問題に対する関心は高く、彼とケインズがケンブリッジに登場したことは重要な新しい血の注入をもたらしたが、彼が去ったことはケンブリッジの最大の弱点である問題に大きな空隙を残したのである。さ

らに、1911年にトライポスの第1優等生を取得するラヴィントンは27年に若くして死去し、ヘンダーソンもケンブリッジを去ることとなる。このことが、1930年代にケインズ・サークルを中心とする理論分野の研究に対して、応用経済学の分野に対する評価が低下する原因となる。レイトンが担っていた応用経済学の分野は、彼の教育を受けた次世代の研究者が担い育てていくことになる。

最後に、マーシャルが創設した経済学トライポスから育て上げられたレイトンがケンブリッジを去った理由としては、彼の経済的並びにケンブリッジの財政的な問題があげられよう。学問が権威を持つためには、財政的な裏付け並びにポストと密接につながる必要性がある。ケンブリッジでは1920年に応用経済学の教授職の創設を画策するのであるが、それは実現には至らなかった。その結果、ケンブリッジではレイトンを失うことになる。

#### IV. ウォルター・レイトンと『エコノミスト』

レイトンの政府の要職への関わりは、当時、要職に就いたベヴァリッジ、ケインズと比較すると興味深く対照的であるとの指摘もされており重要な研究課題であるが、本報告では今後の課題として別の機会に譲ることとする。

レイトンは政府の要職中からエコノミスト社の仕事を行い、1922年に『エコノミスト』の編集主幹になり16年間その職を続け、さらに1944年から63年まで会長職を行う。

『エコノミスト』の研究は、ウォルター・バジヨットを中心とした岸田理会員の研究が存在する。さらに、『エコノミスト』の100周年並びに150周年の記念的研究も存在する。

レイトンが『エコノミスト』で果たした役割としては、大きく3つをあげることができよう。最初は、政府の役割、政府の国家干渉に対しての『エコノミスト』の編集姿勢・基本原理の問題である。創刊当初の『エコノミスト』は反穀物法連盟の機関誌的性格を持っており、自由主義を基本原理として編集されていた雑誌である。ところが、レイトンが編集主幹の時代には、これまでの基本原理から国家干渉の容認へと編集方針を転換しているのである。第2に、『エコノミスト』の創業家が同社を売却するのに、同社の編集における独立性並びに伝統を守ったことである。最後は、同誌の沈滞期に紙面の編集の刷新を行い、新しい統計手法の導入と古い統計手法の刷新を行い、同誌の流通部数を伸ばしている。

さらに、レイトンの同誌への統計的な貢献について考察していく。『「エコノミスト」の百年』では、同誌が100年間続いてきた理由の一つとしては創設者たちが設けた「安全装置」つまり「量的な接近」・「統計への不断の訴え」であると回顧している。同誌は、最初から適切な統計によって自誌の記事を例証したり、客観的なデータを提供することによって彼ら自身に結論を見いださせようとしたのである。フィッシャーによると、『エコノミスト』がイギリスのみならず世界でも「卸売物価指数」を最初に採用したが、それは時代遅れになり、レイトンが古い卸売物価指標を改訂し、新指標を導入するなど統計技術並びに分析手法を刷新するのである。

『百年』では同誌が果たした統計の役割を述べ、その中でもレイトンの貢献を積極的に

評価し、これからも大いに発展の必要性を述べている。『エコノミスト』において、彼の果たした同誌の編集方法の堅持と独自性は十分に評価すべきものである。彼の学生・研究者の時代に養ってきた経済学、特に統計の能力が同誌において十分に活かされたのである。

## むすび

経済学教育の視点からマーシャルとレイトンを考察してきたが、マーシャルは経済学という「学問の将来」を考えた経済学者であった。彼は、経済学の教授就任直後から、経済学はモラル・サイエンスからできたものであるがいつまでもモラル・サイエンスの一部であってはいけないという考えを持っていた。マーシャルは、経済学という学問の地位向上のために、ケンブリッジで歴史学やモラル・サイエンスのように独立してトライポスを創り、「経済学の将来」を担う人材が輩出できることを考えていたのである。トライポスの創設という仕事のために、彼は教授に就任してから 20 年以上の歳月を費やし、それと伴に多くの犠牲を払ったのである。彼が創設したトライポスによって最初に輩出された経済学者として、レイトンという人物がいる。彼はピグーやケインズ、ロバートソンと比べるとマーシャル経済学の継承者のまたは批判者の色彩は薄い、レイトンは統計の専門技術を持ってマーシャルの経済学の良き説明者であった。マーシャルはレイトンをケンブリッジでの活躍に期待したが、マーシャルから受け継いだ彼の現実感覚を彼は『エコノミスト』で活かすことになる。マーシャルの「知の継承」と「知の創造」として、経済学トライポスは存在するのである。レイトンはマーシャルの応用経済学分野の継承者であり、マーシャル経済学からの新たな学問分野の創造者でもある。

## 参考文献

David A. Collard, 'Cambridge after Marshall', J.K. Whitaker edited *Centenary Essays on Alfred Marshall*, Cambridge University Press, 1990.

David Habback, *No Ordinary Press Baron: A life of Walter Layton*, Weidenfeld and Nicolson, 1985.

橋本昭一「経済学トライポスの創設とマーシャル」, 『経済論集』(関西大学), 第 39 巻第 3 号, 1989 年.

Tamotu Nishizawa, 'The Economics Tripos and Marshallian School in the Making, Workshop Paper, 2003.

The Economist Newspaper Limited, *The Economist 1843-1943 A Centenary Volume*, The Economist Newspaper Limited, 1943. エコノミスト社編(岸田理訳)『「エコノミスト」の百年 1843-1943』日本経済評論社, 1994 年.

本研究は、科学研究費基盤研究(C)課題番号 17530156, 文部科学省海外先進教育研究支援プログラムの援助を受けている。